

SDGsの取り組み

湿地環境維持管理の継続でSDGsへの貢献

具体的な数値目標とロードマップによる現状と方向の把握

十勝川中流部市民協働会議
帯広河川事務所

SDGsとは



- 持続可能でより良い世界を目指す国際目標
- 17のゴール目標と169のターゲットによって構成
- 発展途上国のみならず先進国自らが取り組む

平成24年度 再樹林化防止を目的に掘削された湿地環境



- 1. SDGsを『美しいスローガン』にするのではなく、
数値指標と具体的な行動の課題別目標に明確化する。
- 2. 進捗率と進むべきベクトルを定期的にチェックしながら
行動する。

SDGsに対する私達の考え方。

湿地環境の維持管理で該当するSDGs目標

13 気候変動に
具体的な対策を



13【気候変動に具体的な対策を】

行動→再樹林化を防止し、湿地、草原環境を維持することで、再繁茂するヤナギ林の伐採量を減らしその工事に伴う温室効果ガス(二酸化炭素量)を抑制する。

目標→2030年までに温室効果ガスを45%削減する。

15 陸の豊かさ
を守ろう



15【陸の豊かさを守ろう】

行動→ヤナギ単層林から多様なハビタットへの変化で創出した、生物多様性を維持する。

目標→湿地環境の創出により26%増加した生物種数を2030年まで維持する。

17 パートナース
シップで
目標を達成
しよう



17【パートナーシップで目標を達成しよう】

行動→川づくりにおけるアイヌ民族文化とのパートナーシップと民族文化伝承への協力

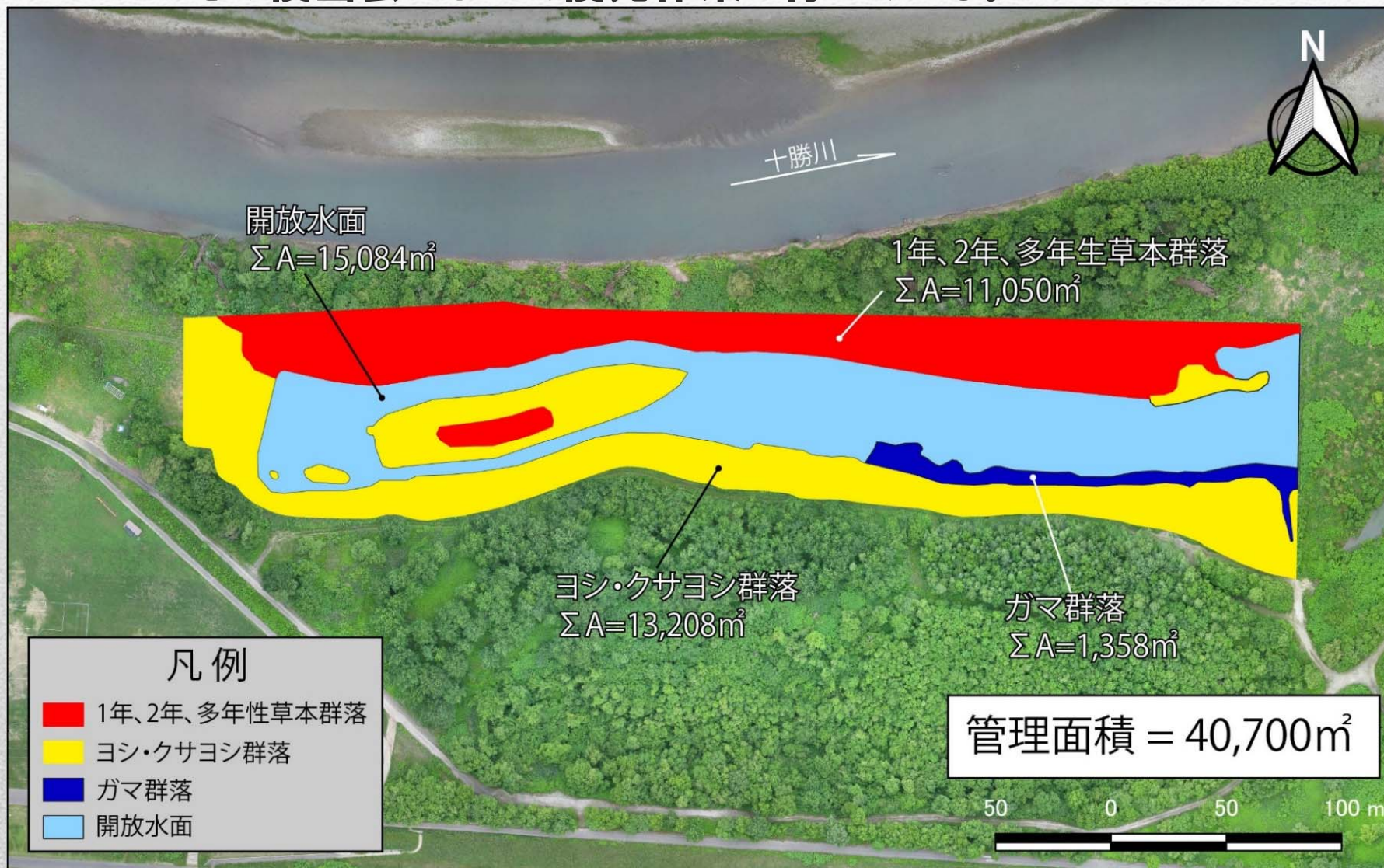
目標→32.4m²/年のゴザ※原材料のガマを提供し続ける。

※「チタラペ」と呼ばれ、ガマの葉を原料としており、アイヌ民族の伝統儀礼の際に使用する。



13【気候変動に具体的な対策を】

平成24年度に帯広河川事務所により掘削されたが、平成28年の増水で冠水し水面が当初より半分以下になってしまう。その後当会によって復元作業を行っている。





13【気候変動に具体的な対策を】

生長によって繁茂するヤナギ林を水面、草原環境に代えて伐採量を減らし、工事に伴う温室効果ガスの発生を抑制する。

ヤナギ伐採処理で発生する温室効果ガス（二酸化炭素換算）

haあたりで換算

伐採量は339空m³

項目	軽油使用料 (ℓ)	数値根拠	排出量係数	二酸化炭素 排出量(t)	備考
伐木(密)	373	歩掛	2.619	1.0	
集積(除根あり)	506	歩掛	2.619	1.3	
運搬	649	歩掛	2.619	1.7	工場まで 30km
バークチップ破碎	434	聞き取り	2.619	1.1	空体積 500m ³ 処理に 640 ℓ 1ha あたり 434 ℓ
処分場内積み込み等	115	聞き取り	2.619	0.3	処分場内積み込み補助等は タイヤショベルで行う
再搬出	176	歩掛	2.619	0.5	消費地までの距離 10km 空体積の1/2
合計	2,253			5.9	



13【気候変動に具体的な対策を】

生長によって繁茂するヤナギ林を水面、草原環境に代えて伐採量を減らし、工事に伴う温室効果ガスの発生を抑制する。

管理面積	40,700 m ²	4.07 ha
伐採時の温室効果ガス	$5.9 \text{ t} \times 4.07 \div 24.01 \text{ t}$	
20年に一回の伐採として、排出量を年換算	1.20 t/年	

当会が湿地環境を維持するために排出する温室効果ガス

$$\text{バックホー} 0.7 \text{ m}^3 \text{級} \quad 16 \text{時間} \times 16 \text{ l} \times 2.619 / 1000 \div 0.67 \text{ t}$$

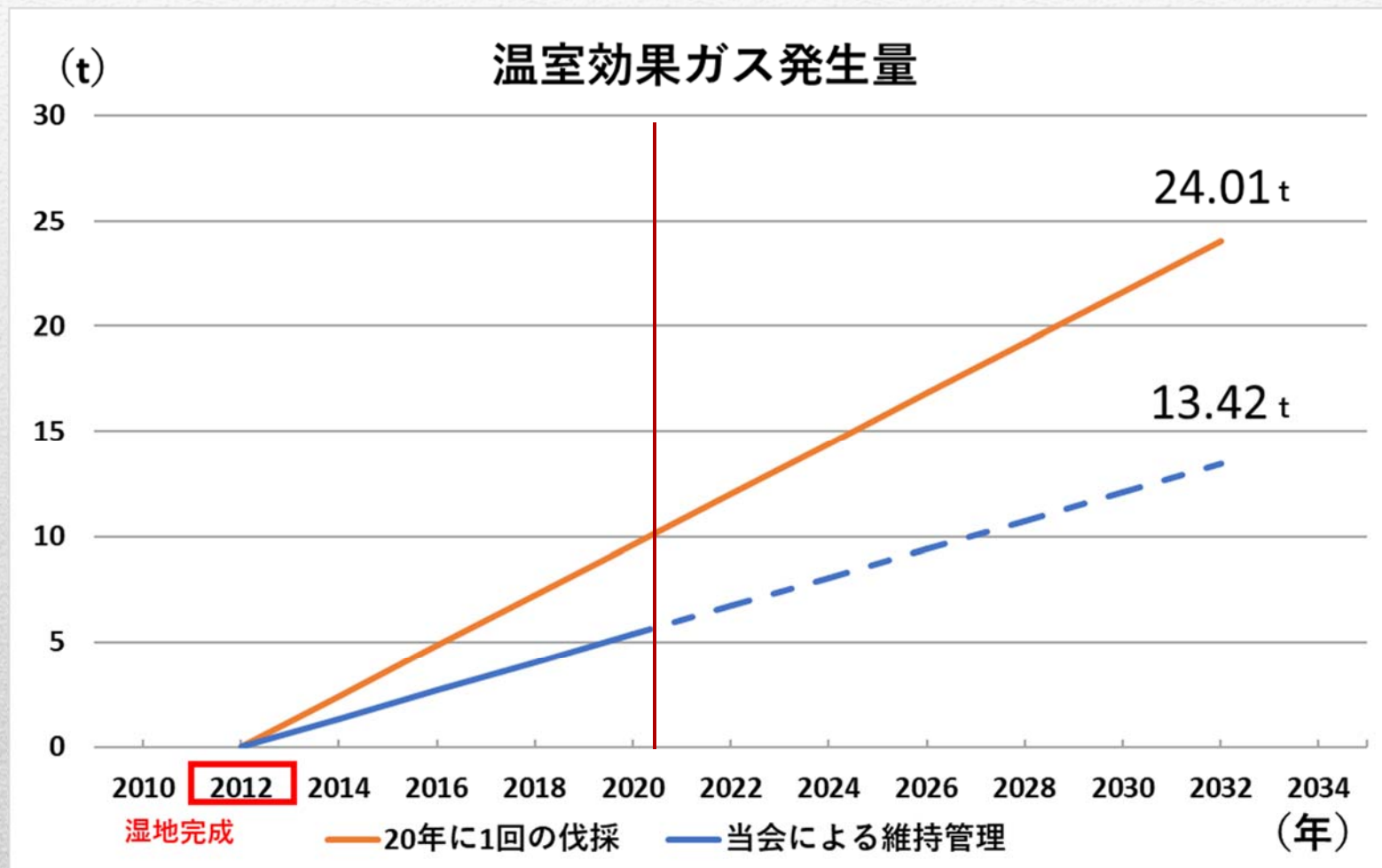


$$1.20 \text{ t/年} > 0.67 \text{ t/年} = \underline{\underline{45\% \text{の抑制!!}}}$$



13【気候変動に具体的な対策を】

生長によって繁茂するヤナギ林を水面、草原環境に代えて伐採量を減らし、工事に伴う温室効果ガスの発生を抑制する。





15【陸の豊かさも守ろう】

ヤナギ単層林から湿地環境を含む多様なハビタットへの変化で、
生物多様性を創出

世界自然保護基金(WWF)の報告によると、世界の野生生物の数は、
過去40年で58%減少したという。

種の絶滅速度

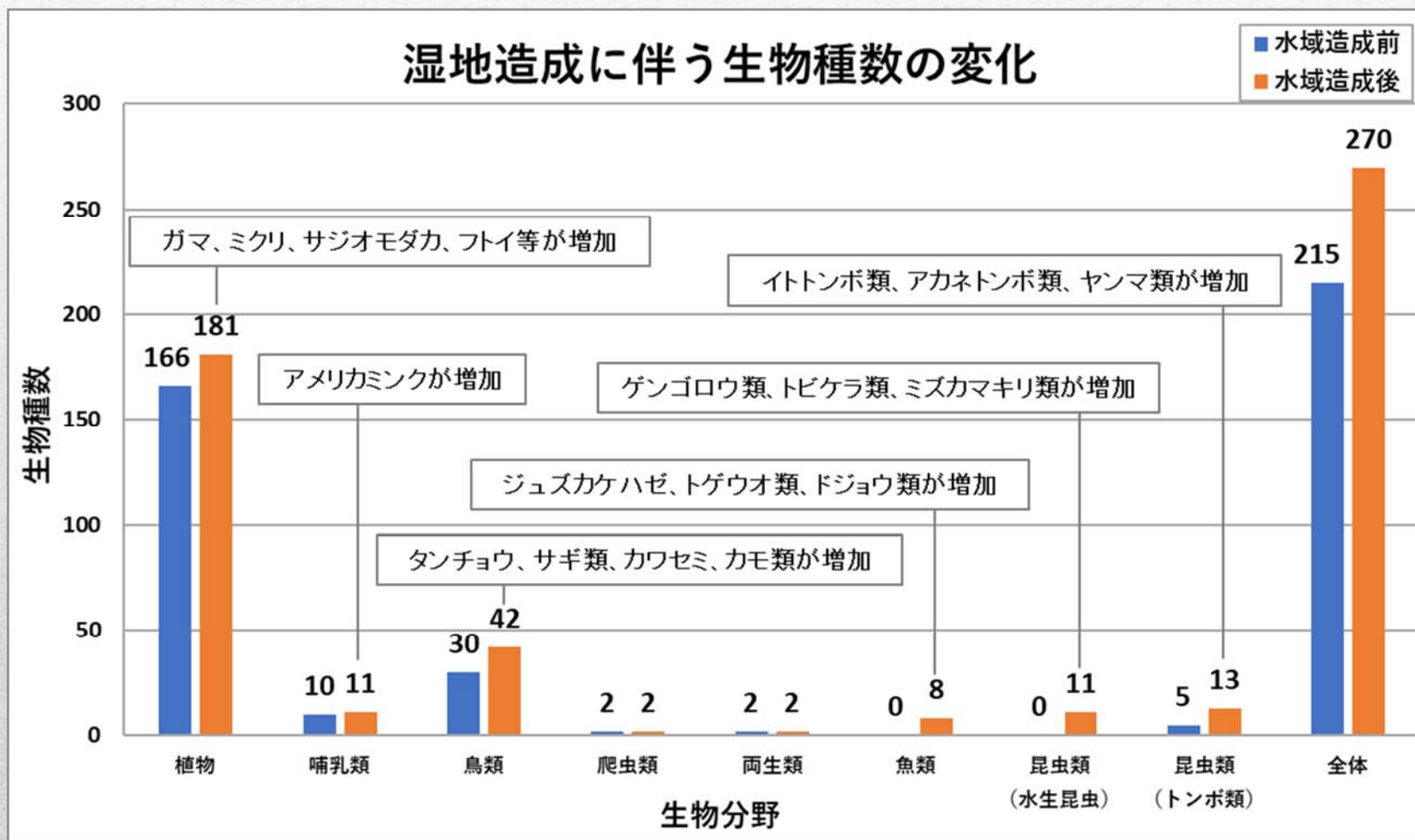


出典：ノーマン・マイヤーズ著「沈みゆく箱舟」(1981)
より環境省作成



15【陸の豊かさも守ろう】

ヤナギ単層林から湿地環境を含む多様なハビタットへの変化で、
生物多様性を創出



造成した水域に飛来したタンチョウの親子(2020.1.7)

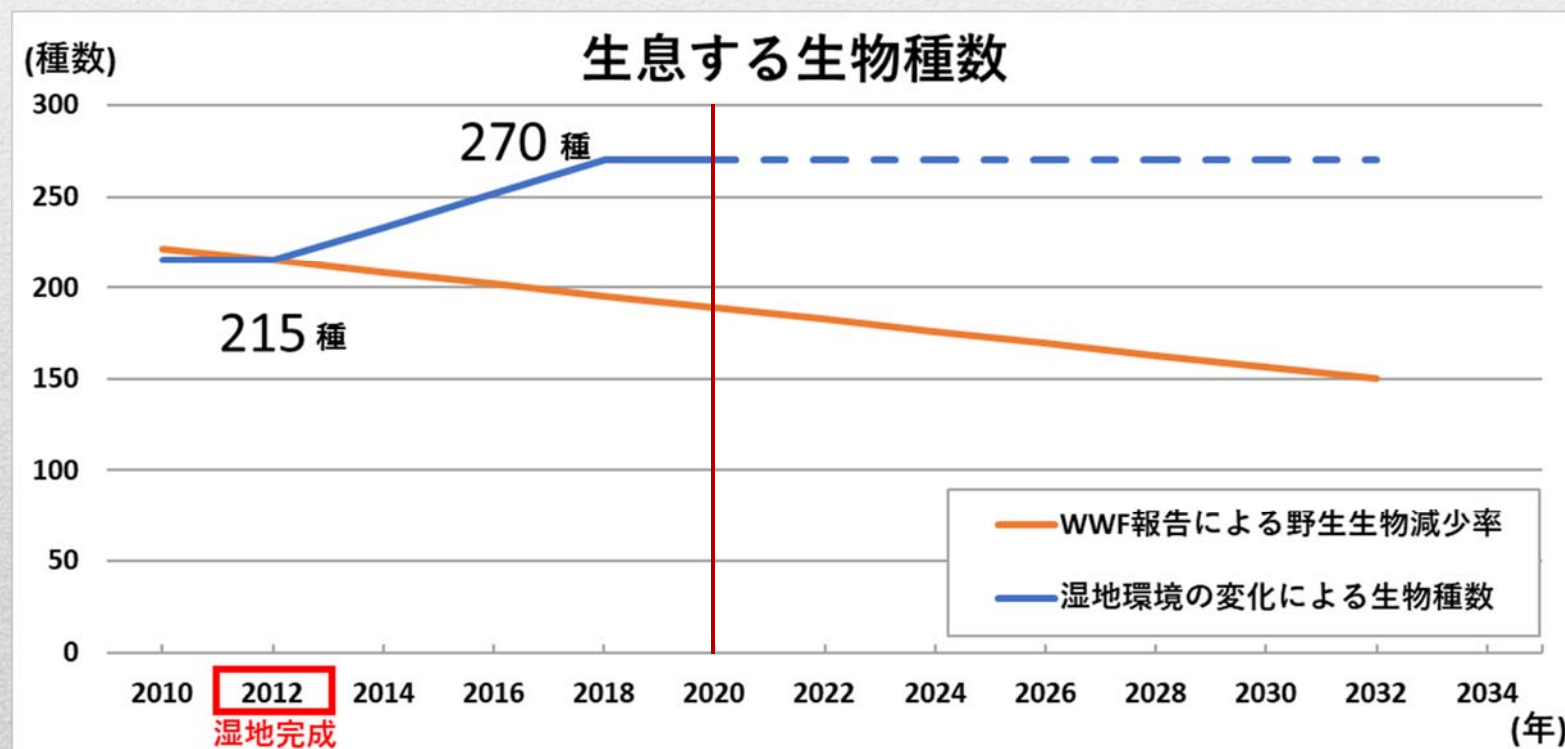




15【陸の豊かさも守ろう】

ヤナギ単層林から湿地環境を含む多様なハビタットへの変化で、
生物多様性を創出

- 2020年から2030年までの世界の生物種減少率 前述グラフより推定
 $58\% \div 4 = 14.5\%$ 10年間の減少率
- ヤナギ林の一部を湿地環境に変化させることで増加した生物種数
215種 → 270種 26%の増加





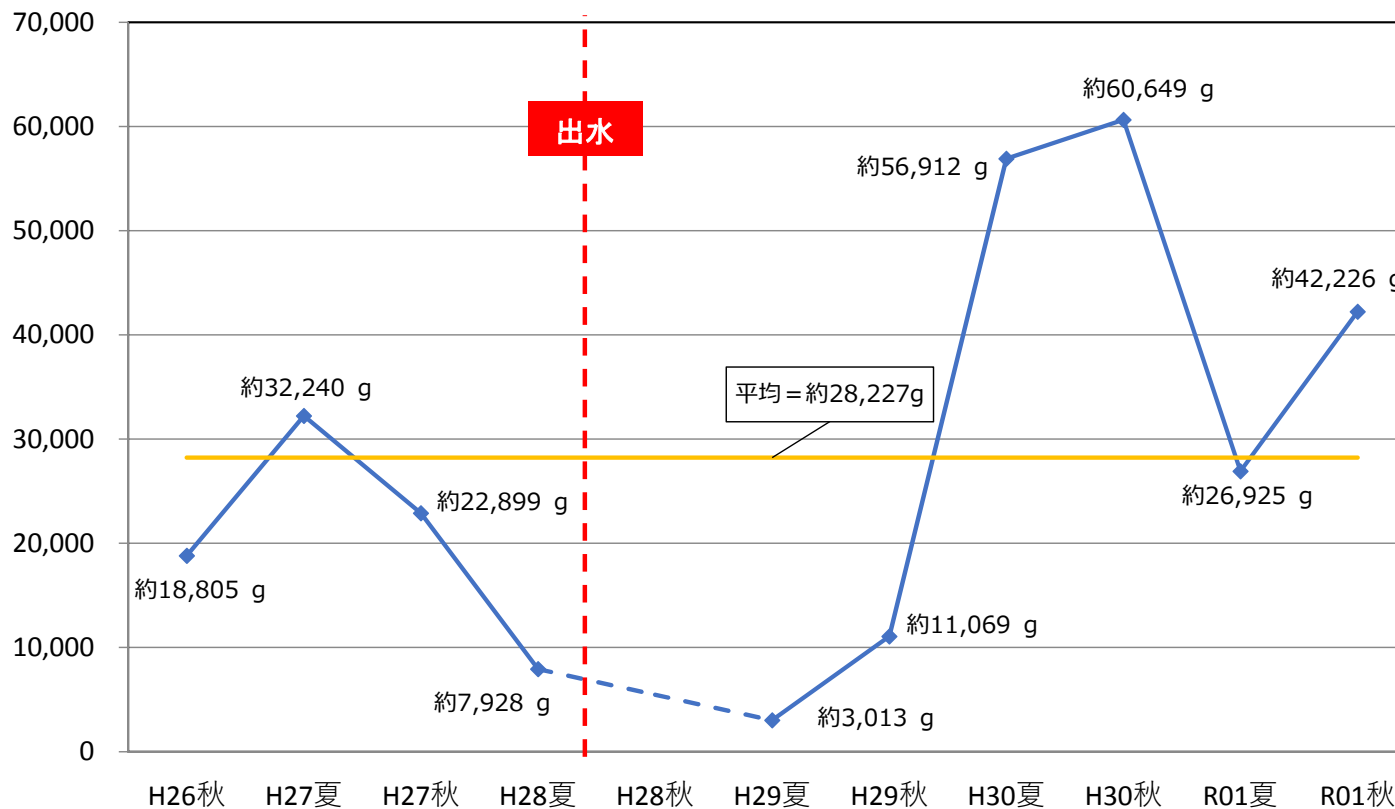
15【陸の豊かさも守ろう】

実践教育フィールド提供

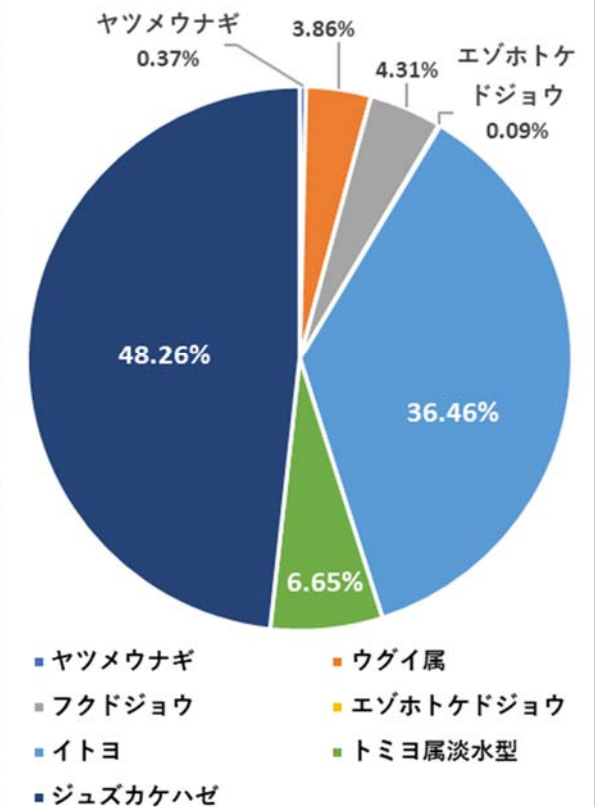
帯広農業高校との連携による継続的な魚類調査



水域全体に生息する魚類の全重量（推定値）の移り変わり



これまでに捕獲された魚類の種構成





17【パートナーシップで目標を達成しよう】

民族を超えた知恵を共有する地域連携

アイヌ民族の知恵(ユーカラの伝承)

必要な量を獲るのではなく、復元可能な量しか獲らないアイヌ民族の知恵に学び、連携協働で民族文化の伝承に協力する。

アイヌ民族の伝統儀礼に使用するゴザの原料であるガマの提供

- ・ ガマ生育地が減少 → 湿地のガマ生育地に圃場を創出
- ・ 2030年を目標として、十勝管内のアイヌ協会が希望するガマの数量(年間32.4㎡程度のゴザを制作できる分)を提供できる圃場を協働で維持する

市民協働会議→圃場の造成・維持管理

アイヌ協会 → ヤナギ実生の刈り取り・生育地の維持管理



17【パートナーシップで目標を達成しよう】

民族を超えた知恵を共有する地域連携

十勝管内のアイヌ協会・帯広農業高校・十勝川中流部市民協働会議の連携で
ガマ圃場を造り、維持する。



当会によるガマ圃場の造成・協働で維持
→十勝管内のいくつかのアイヌ協会にガマを提供



マクンベツアイヌ文化伝承保存会と帯広農業高校
の連携によるガマの採取

→ガマ採取・ゴザ編み等高校生も含めてパートナーシップ
を継続する



17【パートナーシップで目標を達成しよう】

民族を超えた知恵を共有する地域連携

聞き取りにより、復元可能な採取率を決定し、ゴザ制作に必要な面積を圃場面積の目標とする。

- 1 m²あたりの生育株数 15 ～ 20株
- 1株当たりの葉の数 5 ～ 10枚
- 1 m²あたりの生育するガマの葉の数 130枚(75 ～ 200枚)
- 1 m²あたりの復元可能な採取量(アイヌ伝承) 13枚 ÷ 10枚 10%
- ゴザ1 m²に必要なガマの葉の数 470枚
- ゴザ1 m²に必要なガマ圃場面積 47 m²
- 目標とするゴザの制作面積 32. 4 m²/年(20畳程度)
- 必要な圃場の面積 1523 m²**



17【パートナーシップで目標を達成しよう】

民族を超えた知恵を共有する地域連携

毎年20畳(32.4㎡)程度のゴザを制作できるガマ圃場を造成・維持する。

(1523㎡)

